





紅海のサンゴ礁。サンゴ礁の海が透明なのはプランクトンが少ないせいである。そのため多くの生き物は共生しあって生息空間を確保している

は、そんな攪乱から、ふたたび秩序だったバランスを回復しようという動きが生じるからである。このダイナミズムこそエコロジカルな自然の本質である。異質なものを闇雲に排除するのではなく、たえず異質な要

素に呼応しつつ、新しいバランスを回復しようとする。それが地球という大きなビオトープのいとなみである。たとえホームビオトープであっても、そこに閉鎖的な安定性を求めよ



うとすればするほど、外部から手を加え続けなくてはならなくなる。それは心の癒しにはなるかもしれないけれど、自然の本質からは遠ざかることになる。ベランダの小さなビオトープであっても奥は深いのである。

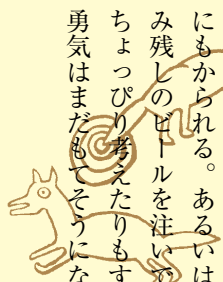
ベランダ・ビオトープよりずっと大きなスケールだが、1990年代にアリゾナに「バイオスフィア2」という人工生態系が造られた。ガラス製のドームの中は閉鎖空間になっていて、内部は熱帯雨林やサバンナ、砂漠、海や湿地帯などに分かれ、それぞれの環境に暮らす約4000種にのぼる動植物が入られた。そして1991年から8人の研究者がこの中に入り、2年にわたって自給自足の生活をするという実験が行われた。空気も水も食料もこの閉鎖空間の中でまかない、地球の生態系の再現を試みるというのが、当初のもくろみだった。

ところが、実験が始まって早くも3カ月後には、二酸化炭素濃度が上昇し始め、ドームの換気を行わざる

をえなくなつた。ドームの中の植物の光合成が不十分だったのである。また、太陽熱のためにドーム内の温度が60度以上にもなるため、外部電力によってドーム内を冷房しなくては生命維持ができなかつた。

結局、ドーム内の恒常性を保つには、外部からの多大な働きかけが必要なのが明らかになった。現代の科学ではとても閉鎖的なミニ地球システムなどつくりえないのである。かつて、この失敗によって、地球がいかに精巧な生態系維持のシステムかがあらためて確認されたというのが、「バイオスフィア2」計画から得られた教訓だった。

ベランダの甕の中で増えつづけるタニシやエビを眺めつつ、もしここでいっさい手を加えるのをやめたら、甕の中はどのように変化していくのだろうか、確かめてみたい誘惑にもかられる。あるいは編集長の飲み残しのビールを注いでみたら、とちよつぱり考えたりもするが、その勇氣はまだもてそうにない。



## 田中真知

たなか まち

【プロフィール】1960年東京生まれ。作家・翻訳家。1990年より1997年までエジプト在住。著書に『アフリカ旅物語』（北東部編・中南部編、凱風社）『ある夜、ピラミッドで』（旅行人）、訳書にグラハム・ハンコック『神の刻印』（凱風社）、『惑星の暗号』（翔泳社）など。